

青森県立高等学校将来構想検討会議 三八地区部会（第2回）概要

日時：平成26年12月17日（水）

13:00～15:15

場所：八戸高等学校

<出席者>

三八地区部会委員

斗沢 一雄 地区部会長、伊藤 博章 地区部会副会長、赤坂 寿 委員、
石毛 清八 委員、橋本 修 委員、平間 恵美 委員、三上 雅也 委員、
山子 泰典 委員

1 開会

- 西谷室長から、挨拶があった。
- 事務局から委員を紹介した。

2 調査検討

(1) 地区部会の検討の進め方について

事務局から、資料2、資料3をもとに地区部会の位置付け、今後の地区部会等の開催計画、当日の検討の進め方について説明した。

(2) 本県における高等学校教育改革の取組状況等について

事務局から、資料4「高等学校教育改革の取組状況等」、資料5「各地区の高等学校の状況等」、資料5附属資料「青森県基本計画『未来を変える挑戦』三八地域」、資料6「高等学校教育に関する意識調査等（速報）」について説明した。

(3) 学校・学科の在り方について

① 「地区の目指す学校・学科の在り方」についての意見交換

地区部会長から、将来の望ましい教育環境（どういう学校や学科が必要なのか）について、新たな視点からの意見を求めた。

委員から次のような意見があった。

- 三八地区の産業構造を考えると、農業、工業、商業、水産は是非ともなくてはならない学科である。志望人数が多い・少ないではなく、この地域が伸びていくように、現在ある農業、工業、商業、水産などの学科については存続のための工夫の余地があると思う。
- 以前、三戸高校の商業科がなくなったときに、生徒の進路先が限定されてきていると感じた。例えば、南部町から八戸市内の商業高校に通うのは、乗換が多く

て困難である。南部工業高校の募集停止もあり、三戸郡の中学生の進路が限定されてきているように感じる。

- 田子高校は、田子中学校からの入学者数が減少しているという厳しい現実があるが、田子高校があるから高校に通えている生徒もいるということ、もしも、田子高校がなくなった時に、交通費などの事情で他の近隣の高校に全員が通えるのだろうかということを考えると、田子高校の存在意義はとても大きいと感じる。ICTの活用などを検討しながら存続についても検討しないと、生徒数減少で高校をなくすることで、経済格差によって高校に入れる子どもと入れない子どもが出てきてしまうのではないか。地域の活性化や定住人口・労働人口を増やそうという取組の中で、地域に関心を持ってもらうための取組が、高校になるとどうしても薄くなっているような気がする。
- 地元の大学に残ったり、地元就職して地域のために貢献したいと思う子どもたちもある程度はいる。そのような子どもたちを増やすために、教育の面でも、地元に残って地域を活性化させることが大事だと伝えていく取組があっても良いのではないか。
- ② 資料7「1 学校・学科の在り方に関する基本的な考え方」から「2（3）総合学科の基本的な方向性」までについて

事務局から、資料7「1 学校・学科の在り方に関する基本的な考え方」から「2（3）総合学科の基本的な方向性」まで説明した。

委員から次のような意見があった。

- 資料の中に「拠点校」という言葉が出てくるが、具体的にイメージしていることがあれば伺いたい。また、「単位制」について説明していただきたい。
- （事務局）拠点校は明確に定義付けをしてはいないが、例えば工業高校では、基幹となる学科（電気、機械、建築、土木等）を全て学ぶことができる学校を拠点校と考えており、地区によっては、全てを整えることが難しい学校もあるため、そのような学校を拠点校がサポートしていくということをイメージしている。

進学に関しては、県内で進学に向けて中核的に取り組んでいくような学校が拠点校というイメージである。

拠点校があれば、そうではない学校もあると考えられ、例えば、農業高校に関しては様々な分野の学習の機会を提供できる拠点校と、地域に根ざした特色ある分野に力を注ぐ高校がある、というように第1分科会で話し合われてきたところである。現段階では、地区の中でどこの学校を拠点校にしようというイメージはない。

単位制は、学年制のように各学年で所定の単位を修得して進級・卒業するとい

うのではなく、3年間で卒業に必要な74単位を修得すればよいという仕組みである。特徴として、選択科目を多く設定しており、学校独自に「学校設定科目」を設けているケースもある。定時制は全ての学校が単位制である。

- 中学生の多くは普通科を希望している。これからの学校・学科については、生徒・保護者・地域のニーズを大事にしながら次期計画を進める必要がある。また、各学科の理念が実際に具現化されているかどうかの吟味も必要である。さらに、定員割れを起こしている学校・学科は中学生から支持されていないということであり、そのような学校の存続の在り方や、生徒数が少ない中で質の高い教育を保証できるのかなどについて慎重に検討していく必要がある。
- 保護者の立場からすると、県立高校が多いというのは経済的に考えてもうれしく、選択肢が多くありがたいと思う。
- 企業の後継者不足という状況の中で、その企業を引き受ける人材を育成していくことは必要。それが普通高校であるか工業高校であるかは別にして、中核となる学校は必要だと思う。
- 学校を減らすとか減らさないとかという問題よりも、やはり地域としてはどのようにやっていったら良いのかということが一番大事だと思う。
- 農業高校や工業高校からも大学に進学する生徒が増えてきていることを考えると、大学受験に対応した授業をしていくことが必要であり、確かな学力が求められている。
- 自分の学びたい学校に進学している高校生は良いのだが、そういう子どもたちばかりではなく、大学受験の壁にぶつかった時に深い悩みを抱えている生徒も多い。専門高校で専門性を深めたい子どもの願いがあっても、その道で挫折した時に普通の勉強に遅れが出るのではないかと考える親もいる。このような状況を改善するためにも、中学生や小学生に対して、自分の住む地域の高校での学びについて情報発信をすると良いのではないか。特色ある取組をして全国に発信している高校も多いので、もっとアピールしてほしい。
- 商業高校で何を学んでいるのか理解されていない部分もあり、中学校に対して情報発信をしている状況である。商業高校を卒業すれば就職という固定観念があるが、現在は進学と就職は半々で、普通科イコール進学ではなく、専門高校に行っても進学できるということをアピールすることが必要だと思う。商業科では社会に出て役に立つ実学を学んでおり、地域の人材育成に積極的に取り組んでいる。特に八戸地区では全ての産業において、いろいろなところで卒業した先輩方が活

躍しているということもあるので、専門高校を強調していかなければならないと思う。

③ 資料7「3 定時制課程」「4 通信制課程」について

事務局から、資料7「3 定時制課程」「4 通信制課程」について説明した。

委員から次のような意見があった。

- 現在、スクールソーシャルワーカーはどれぐらい配置されているのか。
→ (事務局) 北斗高校、八戸中央高校などの3部制高校に配置され、非常に大きな効果を上げている。

→ (事務局) 地区部会長から事務局に対し、eラーニング、ICTについて説明を求めた。
→ (事務局) 高校においては、対面式で同じ場所で先生と生徒が授業を行うというのが前提になっているが、離島の学校などでは各教科の先生を揃えることが難しいため、インターネットを利用して、離れた所で行っている授業を受けることができないかということが、現在、国で検討されているところであり、来年度からの実施に向けて法律上の整備などに動いている段階である。現在は、卒業に必要な74単位のうち半分未満までは遠隔授業で単位修得を認めるようにするとか、どの教科であればインターネットを使った授業が効果的なのかということが研究されている。先進的な事例としては、北海道や長崎県の離島の例がある。

- 定時制、通信制の高校は現在、市部だけに設置されており、三戸郡からも八戸市内に通学している。バス代などの通学費も相当かかっているが、町村部には設置していないということが、全日制と異なる点である。

④ 資料7「5 学科構成等について」について

事務局から、資料7「5 学科構成等について」について説明した。

委員から意見はなかった。

⑤ 資料7「6 縦の連携・横の連携について」について

事務局から、資料7「6 縦の連携・横の連携について」について説明した。

委員から次のような意見があった。

- 中高一貫教育には3つのタイプがある。連携型、併設型、中等教育学校である。連携型は、同じ地区にある既存の中学校と高校が連携を結んで、ほとんど学力検

査を受けずに、希望した生徒は高校に入学できるという仕組みである。少し前まで大湊中学校と大湊高校とが連携関係にあったが、大湊中学校の生徒数減少等により解消されている。

三本木高校のような併設型は、高校と同じ敷地に県立中学校を設置しているので密着性が強い。県立中学校の生徒は適性検査等で80人選ばれる。その生徒たちが高校に進学する際には、自動的に三本木高校に入学できる。その他に、高校入試を受けて入学してくる生徒が160人おり、高校の1学年の定員は240人となっている。

中等教育学校とは、6年一貫の学校を設置するものである。

進学指導や生徒指導で成果を上げるには中等教育学校が一番良いと思われるが、本県にはない。次に良いのが併設型である。

連携型は田子中学校と田子高校で行われているが、田子中学校の生徒数が減っていることもあり、以前に比べて規模が小さくなっている。

三本木高校附属中学校には十和田市内だけでなく上北一円から生徒が入学しており、その生徒たちは三本木高校では行事や勉強などで周囲を引っ張っていくような活躍をしている。また、難関大学への合格実績も伸ばしている。しかし、最近は少子化の影響もあり、附属中学校への入学志願者の倍率は当初に比べると低下傾向にある。本県で併設型を広げていくには、設置する地区などを慎重に検討しなければならない。中南地区だと弘前大学教育学部附属中学校があり、八戸市は上北地区との競合になってしまう恐れがある。課題はあるものの、設置する価値があることは確かである。

⑥ 資料7「7 その他」「8 第2分科会での検討における留意事項」について

事務局から、資料7「7 その他」「8 第2分科会での検討における留意事項」について説明した。

委員から次のような意見があった。

- 「遠距離であっても、生徒自身が志望する高等学校に通学できる施策、例えば、スクールバスの運行や寄宿舎の設置などについて、検討する必要がある」とあるが、そのとおりだと思う。会議の中で、どういう功罪があるかを検証する必要があるのではないか。スクールバスが無理であれば、ある一定以上距離が離れている場合には通学補助金を出すなどの援助がなければ大変だろうし、できれば市内の高校に通う生徒のための寄宿舎を作ることも考えていいのではないか。いくつかの学校に通学する生徒が混在することにより、ある意味で良い教育の提供に繋がるかもしれない。
- 八戸市内の小・中学校で一番悩ましいのが、特別支援学校における指導ではなく、特別な支援を要する子どもたちが非常に増えているということである。八戸

市では約72名のサポート人員を雇っているが足りない状況である。高校でも恐らく同じような状況なのではないか。小中高一貫して、手厚い人の配置をしていくべきだと思う。

地区部会長が、今後、次期計画を策定していく中で、地域の方々から意見を聞く上で、どのようなことに留意すれば良いか意見を求めた。

委員から次のような意見があった。

- 地域の方々の声を丁寧に聞くということが、結果がどうであれ大事なことである。意見を聞く時期としては、学校の規模・配置の方向性に、ある程度目途がつく来年7月あたりが一つの目安ではないか。方向性が全く出ていない時に意見を聞いても、意見が拡散してしまい焦点化されない。一般の市民の方々が関心のある学校の規模・配置の方向性が出た頃に、パブリックコメントや校長会、連合PTAなどで意見を聞いていくことが良いのではないか。来年の2月、3月あたりだと、まだ方向性が固まっていない段階なので適切ではないと思う。
- 広くいろいろな意見を聞くことが大切である。それが直接反映される、されな
いに関わらず、広い範囲で意見を聞くべきである。教育、福祉、NPO、企業など幅広く意見を聞くようお願いしたい。

本日の会議で出された意見を事務局が取りまとめ、それを地区部会長が確認した後、三八地区の意見として第5回第1分科会で報告する旨の発言が地区部会長からなされた。

3 閉会